

ツラメラ遺跡と 「古代」リンポポ川中流域世界

吉 國 恒 雄

もう一つのジンバブウェ伝統遺跡

ツラメラ

南アフリカのツラメラ(Thulamela)遺跡では1993年から考古学調査がおこなわれてきたが、96年5月、1450年から1650年頃までの時期のものとして推定される男女二体の遺骨が、大量の金やビーズの副葬品とともに発見された。マンデラ政権樹立後初めてのアフリカ人「古代史」にかかわる大発見ということで、8月以降政府とプレスが積極的にこれを取り上げ、南ア社会でちょっとした考古学ブームが引き起こされた。日本でも、昨年10月28日NHKテレビ夜9時のニュースによって、「南ア遺跡が映す黒人の歴史」として紹介されたので、気づかれた人も少なくないと思う。

遺跡はクルーガー国立公園の最北端に位置し、リンポポ川南岸の低地帯を見下ろす丘の上にある。周辺を含めると、最盛時2000人ほどの人口を擁していた模様で、丘上の石の囲壁が支配者の居住空間であるといった点から分かるように、東南部アフリカでかなり広範に見られるジンバブウェ伝統の流れを汲む都市であった。今回、金の腕輪、インド製ガラスビーズ、明代の中国陶器片、象牙の

お守り、鉄製の二股ゴングや鋏、槍、銅や貝殻製の身体装飾品、さらには機織具や針などが発掘された。これらは、ツラメラが、他のジンバブウェ伝統系の社会と同じく、インド洋とアフリカ内陸の遠隔地交易に関与し、かなり発展した農業と工芸技術をもつ社会であったことを示している。

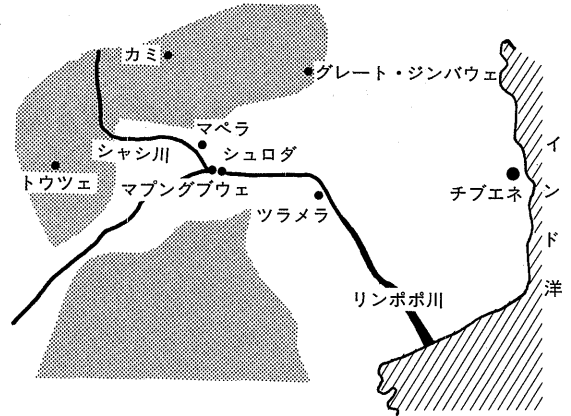
たまたま昨年5月の日本アフリカ学会学術大会で、筆者は、(1)この15年余り、リンポポ川中流域鉄器時代についての重要な考古学的発見が続いている、(2)これによって、この地域が紀元後の早い時期から鉄器農業社会の進化の中心であったことが明らかにされた、(3)また、従来ほとんど不明であった、グレート・ジンバブウェに先行する社会や文化の姿も浮かび上がってきた、と報告したこともあって、今回のニュースをたいへん興味をもって受けとめた。以下、5月で述べた点を簡単に振り返りながら、ツラメラについてコメントしてみたい。

リンポポ川中流域で

急ピッチに成熟した鉄器社会

今日のリンポポ川中流域は暑熱と乾燥が激しい荒涼たる土地であるが、意外にも、この地域(正確

図 リンポボ川中流域世界



に言えば、ジンバブウェ高原南縁部から南アのゾウトパンスベルグ山脈にいたる広大な地域)こそ、かつて南部アフリカにおける鉄器社会のダイナミックな展開の舞台であった。この点を示す最近の考古学研究のうちでまず特筆すべきは、デンボウ (J. R. Denbow) の研究である。デンボウは、現在のボツワナの東部中央(カラハリ砂漠の東端)のトウツエに残る牛の囲い場跡を調べた。そして、紀元700年から1300年までの時代に、ここに牧畜主体の複合農業に基づいた集落が多数存在していたこと、しかも、それらはバラバラに分布するのではなく、水源である河川に沿って一定の間隔で、より大きな集落、とりわけ、支配者が住んだにちがいない三つの大集落を取りまくように位置していること、大きな集落は、多数の牛をきわめて長期間にわたって維持していたことなどを明らかにした。紀元1000年紀後半という古い時代から、活気のある牧畜・農耕経済と(多分牛の授受を媒介とする)ヒエラルキー社会が存在していたことが確認されたわけである。また、トウツエ土器が、ジンバブウェ南西部やトランスバール北部の「初期鉄器時代」のジゾ伝統に類似していることも示された。

かつての通説では、この地域の古い住人はコイサン系狩猟・採集民であった。紀元前後のバンツ一人移動はもっと東方を通過したため、ここでの鉄器時代の開幕は遅れ、17世紀中葉のツワナ・西部ソト人のトランスバールからの移住まで待たねばならないとされた。デンボウの発見はこの考えを根本的に覆した。しかも、それは、後代、いわゆる「後期鉄器時代」(新タイプの土器、農業経済における牛の比重の増加、丘上の石壁と都市、大国家、金の輸出とインド洋交易などによって象徴される)の理解を助ける手がかりともなった。例えば、後期鉄器時代の先端的部分である「豹の丘伝統」(ジンバブウェの南西部の「豹の丘」で最初に発見された)

についてである。この伝統は900年以降リンポボ川北岸地域を南から北に覆っていったとハフマン(T. Huffman)が主張したが、これはバンツ一人移動の逆流となることもあって、一部で疑問視された。デンボウ説は後期鉄器文化の南方起源論を決定的に有利にするものであった。

次に、トウツエの下流、リンポボ・シャシ川合流点近くのシュロダ集落跡の調査(ボイト[E. Voigt]らによる)が重要である。9世紀のこの集落は、複合農業の他に、海外交易に従事していた。象牙の輸出を目的とする象狩りがおこなわれていた模様で、輸入ビーズも大量に発見された。布も輸入されていたらしい。

海外交易に関連して言及されるべきは、インド洋交易拠点としてのチブエネであろう。リンポボ中流湾曲部からまっすぐ東に行ったモザンビーク沿岸にあり、シンクレア(P. Sinclair)らが発掘したペルシャ製陶器やビーズなどは、8世紀というたいへん古い時代を示した。インド洋西部の古代通商世界が、一般の考えよりもさらに南方に伸びていたことを示すものであり、時代的にも、イスラム学者が東南部アフリカについて記述を始めるのが10世紀中葉であったこととだいたい合致していて興味深い(ちなみに、1980年代初め筆者はジンバ

ブウェ大学の鉄器時代ゼミでビーチ [D. N. Beach] に教えを受けていた。そのゼミで上のイスラム文献が話題になった際、ちょっと時期が早すぎる、信憑性を疑うべきではないか、というのが大方の意見であった記憶がある。当時のわれわれの知識と関心は、後代のグレート・ジンバブウェとその末裔に限られていたのである。

リンボポ川中流域における

都市と大国家の形成

リンボポ川中流域で初めて本格的な都市と国家が誕生するのは、シュロダから近いマングブウェ (K2村とマングブウェ丘からなる) である。牧畜主体の複合農業と階層分化、インド洋交易といった、リンボポ川中流域で紀元1000年までに出現した諸要素がここで融合し、一つの頂点を迎えた。プレトリア大学の一連の調査で次のようなことが分かった。10世紀から11世紀にかけて平地にK2集落があった。ここの土器タイプは新しいもので、ジンバブウェ高原とショナ人につながる豹の丘伝統に属した。その経済活動はシュロダに似ていたが、一つ異なったのは、象牙細工、精緻な骨製道具、綿布といった奢侈品が地元の消費のために生産されていたことである。それだけの富裕層が存在していたことになる。

1075年頃K2社会はすぐ近くのマングブウェの丘に移る。続く75年間に社会はめざましく発展し、金の輸出に影響力を行使するに至り、遂には丘を中心とする石の壁の都市を生み出した。1150年から100年ほどの間、丘の近辺には広さ9畝ほどの大集落が築かれた。丘の頂上に支配者が住み、有力者の家には石壁がめぐらされた。支配者が死亡するとサイや腕の形をした金の工芸品と一緒に丘の上に埋葬された。

マングブウェはリンボポ中流域を征する邑都でもあった。幾つかの衛星都市があり、多分その一つであろう、ガーレイク (P. Garlake) が調べたシャシ川河畔のマペラでは、マングブウェと同様、丘の各所に石の壁が配され、頂上に主要な住居があった。ところで、この近辺で金を産出するのは、シャシ川をさらに遡ったジンバブウェ高原南西部だけである。「金工芸の国」マングブウェはマペラを足掛かりにして高原南西部を押さえていたのかもしれない。

1250年頃までに没落が始まった。12世紀末はリンボポ中流域世界にとって干ばつの時代であり、マングブウェ社会も深刻な危機を経験したと察せられる。トウツェが放棄されたのもこの頃である。もう一つ没落を促したファクターは、支配者にとって富の重要な源泉であり、大国家建設の誘因であったインド洋交易がリンボポ渓谷から金の産地である北に移動し始めたことである。ここで、グレート・ジンバブウェが新たな覇者として登場する。

ジンバブウェ高原の南縁、グレート・ジンバブウェの丘の西側にあった集落は、もともとは平凡な後期鉄器時代の村であった。ところが、金の生産と交易を掌握したためであろう、13世紀ごろから急ピッチに豊かになった。やがて、マングブウェやマペラのスタイルを踏襲した石の壁の都市が築かれた。ただ、ここでは石積み技術が独自に発展し、支配者の豊かさと相まって、比類のない大きな囲壁が築かれた。

グレート・ジンバブウェは、版図の広がりにおいても圧倒的であった。同時期の、同じ石壁スタイルをもつ遺構は、南はリンボポ川流域から北はザンベジ川渓谷付近まで、西はカラハリ砂漠の東端から、東は、サビ川流域を経てインド洋沿岸近くまで、それぞれ数百キロの長さの地域に数多く

散らばっている。複数の人々の交渉圏にまたがって存在する、このような遺構は、グレート・ジンバブウェに対してある種の服属関係にあり、それぞれが特有の政治経済機能を果たしていたに違いない。

グレート・ジンバブウェ遺跡の起源について、かつて一部のヨーロッパ人が非アフリカ人説を唱えたこともあったが、現在それは笑い草になっている。ただ、最近までその前史があまりに不明であったため、遺跡が周りの風景から突出して見え、謎の要素がつきまとった。だが、すでに見たように、今われわれは、グレート・ジンバブウェが、紀元1000年紀後半以降に地域で展開してきた鉄器農業社会の進化の延長線上にイメージすることができるようになった。

ツラメラ

トルワ国・カミ文化につながる可能性

さて、ツラメラであるが、まず、貴人が丘上で金細工とともに埋葬されていた点などで、マプングブウェとかなりの類似性を持っていることに注目したい。これは当然といえば当然で、どちらも担い手は、この地域の住人で、石の家伝統を近代まで守ってきたベンダ人（南部ショナ人と関係が深い）であった。ツラメラで今回見つかった「女王」は両手を頬の下に置いた姿で埋葬されていたが、これはベンダ人がロシャ（Iosha）と呼ぶところの敬意のポーズである。

しかし、ツラメラの壁は、マプングブウェはもとより、グレート・ジンバブウェよりも時代が下

がる。最盛期が15世紀中葉から17世紀中葉までということ、ツラメラが、リンポポ川中流域が都市と大国家を育んだ最後の局面に存在したということである。もっと踏み込んでいえば、当時リンポポ中流域に覇をなしたトルワ（あるいはブトゥワ）国（c.a.1450～1690）、文化史的にいえば、ジンバブウェ伝統の主要な継承者であるカミ伝統とつながっていたことを示唆している（グレート・ジンバブウェは1500年頃までに衰微し、その伝統は、リンポポ川中流域とザンベジ川下流域の二つの世界に分裂していった。前者の代表がトルワ国であり、装飾的な石壁と重層的なテラスで知られるカミ〔ブラワヨ郊外〕に首都を置いた。後者の代表は、言うまでもなく、ムタパ〔モノモタパ〕国であり、ここでは石壁文化は次第に消滅していった）。ツラメラで発見された土器類はカミのそれに似ていると伝えられている。しかも、ベンダ人民俗誌から、われわれは、トルワ国がトベラ王朝という名で、遠くリンポポ南岸に政治的支配を確立していたことを知っている。

さらに年代にこだわりたい。ツラメラの最盛期はだいたいポルトガル人の東南部アフリカ到来後にあたる。その後期は、ポルトガル人がリンポポ川の河口近辺で定期的に市を開いていた時代と重なり合う。ポルトガル資料は、従来もっぱらザンベジ下流域世界との関連で検討されてきたが、リンポポ川中流域に焦点を当てた読み方も面白そうである。1715年パリで刷られた地図（作 Nicolas de Fer）に、奥地のブトゥワ王国（トルワ国）の南、リンポポ（Espírito Santo）川の谷間にビリ王国が記されているが、これはちょうどツラメラ遺跡の辺りではなからうか。

（よしくに・つねお／専修大学）